

活動名 自然体験・科学研究支援事業	団体名	広島干潟生物研究会
	地域	広島県広島市
	代表者	会長 川端 信之
	支援金額	31 万円
活動概要		
<p>広島に残された貴重な自然に目を向け、そこに親しむことを第一歩とし、そこから課題をみつけ、探的に考えて解決しようとする力、発表したり働きかけたりといった行動に移せる力を育成しようとしている。また自然の不思議さや美しさを画像に切り取って公開し、それらを通じて市民への啓発活動へとつなげようとしている。</p> <p>活動の柱は、a 干潟観察会、b 科学研究発表会、c 写真展であり、それに伴う準備、指導、関連行事も行い、派遣依頼にも応じてきた。今年度は、a では 2 泊 3 日の日程で有明海一周の旅を加えた。b では 10 テーマの口頭発表・ポスター発表を行った。c では干潟の生きもの 60 点のほかに科学写真 99 点を加えて展示した。</p> <p>活動は、①干潟観察会 5 回、②科学研究相談事業へ講師派遣、③スタッフ研修会、④科学研究指導 23 回、⑤科学研究発表会 口頭発表 10 件・ポスター発表 10 件⑥写真展「干潟の生きものたち」「水・光・瞬間の不思議」 ⑦広島大学理学部シンポジウムへ中学生を派遣</p> <p>◆実施時期 2015 年 4 月～2015 年 12 月</p> <p>◆参加人数 ①278 名、②104 件、③約 200 名、④約 100 名、⑤110 名、⑥不明、⑦4 名 参加総人員:800 名以上</p>		



干潟観察会(白島九軒町)



有明海一周オープンキャンブ(化石採取、干潟観察、火山学習など)



第 3 回 ジュニア科学研究発表会(まちづくり市民交流プラザ)



写真展(まちづくり市民交流プラザ)

◆実施に伴う効果

観察会では、参加者から「こんな身近なところにこんな豊かな自然や生き物が見られることに感動した。」という感想を毎回いただいております。啓発的な活動となっている。ゴミ拾いも併せて行ったところ、参加者に好意的に協力いただいた。研究発表会では、「子どもたちが積極的に自然と触れ合い、探究活動に取り組んでいるのが頼もしい」といった感想が多く寄せられた。広島大学での研究発表は中学生で唯一であり、参加した高校や参観の大学生、大学スタッフにインパクトを与えた。スタッフ研修会では、自然観察の方法、解説の仕方、記録の取り方など実践的な内容を学びあい、実際の観察会やキャンプ等に役立った。研究指導講座では、相談に来た児童・生徒や保護者に感謝された。また、講師として参加した者にとっても得るものが多かった。

◆苦勞した点

- ・ 予算面では、活動の規模が大きくなるにつれ予想以上に消耗品の支出額が大きくなり、業者による印刷費の見積もりが想定をはるかに超えたこともあり冊子の出版は今年度は断念した。
- ・ 外部の PR については、年度当初は観察会のたびにチラシをつくり郵送していたが、郵送料と手間がかかり、また学校に届いても児童・生徒・保護者にまでは情報がほとんど伝わらないことがわかった。その後は中国新聞、西広島タイムス、自前HPに頼っている。
- ・ 地域の理解については、活動自体が地味であり、娯楽的な要素がほとんどなく、ともすれば説教がましいと感じる向きもあると思われる。一方で子どもも親も受験が眼中に大きく、やはり保護者、学校、地域社会への啓発がまだまだであると感じている。

◆今後の課題・発展の方向性

地道にこれまでの活動を進めていく上では、問題はあまりない。ただし、発展性を考えたとき、次のような課題が考えられる。広島市内だけをとっても、自然保護団体、環境問題を考える団体など多数見受けられるが、それぞれが独自に活動している。これらがまとまって大きな組織となり、あるいは上部組織を形成するなどして統一した方向性が打ち出せれば大きなインパクトとなり、社会への啓発が容易になると考えられる。労を惜しまない人、専門性をもつ人はあちこちにたくさんいるのに、ベクトルが分散し、財源が少なく、広報力がないのが現状であり、リーダー、財界、マスコミ等のいっそうの支援が望まれる。願わくば、公の団体（たとえばいまだに県内にはない自然史博物館など）が率先し、専任スタッフがリードしてくれたらよいのだが。

◆活動を終えての感想・意見等

活動を進めるうえで、こまごまとした経費がかさむため、マツダ財団の補助はありがたかった。またネームバリューも大きく、市教委の後援とともにマツダ財団の支援を得ていることの信頼性は絶大であった。

今後については、スタッフはシニア、ジュニアともに意欲的であり、一般参加者も前向きで真剣である。したがって活動自体も充実しており、手ごたえは十分である。しかし逆に考えると、前向きな親子、興味をもっている親子しか参加していないのではないかと、またすそ野を広げることになっていないのではないかとという見方もできる。欧米のように、年齢に関係なく自然の中でゆったりと過ごす文化が日本にはなく、野外活動といえばバーベキュー、海辺といえばアサリ堀り、海水浴やサーフィンしか思い当たらない。また小学校高学年になるかならないかのうちから学習塾に身を任せる家庭がけっこう多い。こういった現状を考えると、よほどの覚悟と行動力、財力、メンバーに恵まれない限り、自然を教師として捉えるという意識を親にも子にも醸成し、そこから、自然を身をもって体験し、自然のしくみや成り立ちを見つけ、科学的に思考し伝達する力を身につけた子どもたちを育成することは、きわめて困難であることを実感している。

ジュニアの活動には目を見張るものがあつた。12月の発表会という目標があつたため、科学研究に力を注ぎ、完成度の高いポスターと、わかりやすい口頭発表は観客をうならせた。かれらはすでに次の発表会を意識しており、司会進行、裏方などの役割を分担し、サイエンスショーの実施を提案してきた。これには6名の女子中学生（この4月からは高校生）がすでに準備に取り掛かっている。適切な場を与えれば意欲的に行動できる若い力の存在に勇気づけられ、これに期待したい。